

世界社会学のために

栗原 彬

一九八四年とはどういう年か。それはさしあたりジョージ・オーウエルの小説の年である。もとよりオーウエルは一九四八年に、いたずら心でその数字をひっくり返したにすぎないのだが、オーウエルの意図を離れて『一九八四』年が現実味を帯びてしまったことも確かである。第二次大戦の敗戦から数えれば三九年。世紀の替りめまで一八年。私たちは今、どこに立っているか。私たちはどこへ行こうとしているか。

日本敗戦後の戦後改革は、戦前と戦後を分けるきわめて大きな変化だった。だがそれは、基本的には制度上の、また法制上の変化だった。戦後改革以上の深い変化、社会構造に届く変化は、一九五五年の技術革新に始まり、一九七三年の石油ショックに至る高度経済成長に相即して起った。この変化は全社会的規模で進行して、政治と文化の景観、都市と農村のたたずまい、職場と家族のあり方、人の身体と意識のありようを一変してしまった。それは生活様式と生活意識に及ぶ、ストックからフローへ向う深い構造的な変化だった。一九六〇年代後半には、公害をはじめとする社会の諸矛盾が噴出して、市民運動や住民運動、若者のコミューンが簇生した。

一九七〇年代から八〇年代にかけて、私たちは、この構造変化と国家の対応、大衆運動と動いていくライフ・スタイルのつくる力学の延長上にある。さらに経済のサービス化、社会の情報化、メディアのエレクトロニクス化といった新しいファクターがこれに加わる。今日、私たちが天皇制とニュー・メディア化、軍事化と保守化、産業化

と管理化の潮流のただなかにあることは否めないのではないか。この時期がまだ「戦後」であって、もう一つの「戦前」ではない、という保証はどこにもない。

産業化を初発とする構造変化は日本に限ったことではなかった。全世界をおおう核体制の下での米ソの競争の亢進。先進工業国における失業・インフレ・経常収支の赤字というトリレンマ（三重苦）。社会主義国間の軍事介入。第三世界における新国際秩序（NIEO）、経済格差の拡大、強権体制の消長。ベトナム戦争後のできごとをみれば、二次にわたる石油ショック、毛沢東の死と中国の現代化、米中の国交正常化、イランのホメイニ革命、ソ連のアフガニスタン侵攻、中米の内戦、ポーランドの自主管理労組「連帯」の成立、イラン・イラク戦争、マルビナス（フォークランド）紛争、アメリカのグレナダ侵攻。そして一九八〇年頃から急速に拡まった核兵器廃絶運動、反原子力運動、エコロジー運動、「緑の党」の躍進などがあげられる。

総じて、資本主義と社会主義、あるいは保守と革新、また南と北という伝統的な座標軸は無効ではないけれども十分に有効とは言えないような世界システムの変動が現在進行中だ。私たちはその変化を記述することはできても、その変化の因果連関あるいは重複決定を捉え切れてはいない。こうした世界システムの構造変化は、認識と実践の装置としての学問のあり方をゆさぶらずにはいない。生活様式と生活意識の変化は学問の感情構造と領域仮説の変容を導き、学問の社会的な位置に移動を生ずるとともに、学問の理論枠組に変更をうながす。二たび三たび、何のための学問かが問われ、学問の存在証明が問い返される。文学研究・文芸批評における読者理論、テキスト理論、デコンストラクション理論の登場。人類学、精神分析学、社会言語学、ネオ・マルクス主義の活性化。哲学の再生、経済学の革新、政治学における「行動論以後」、あるいは歴史研究における社会史やエコロジーの展開は、いずれもそうした学問のパラダイム転換のささやかな徴候である。しかも住民運動、地域の社会活動、さまざまな領域の被抑圧民衆は、各現場で自前の野生の社会科学——民衆演劇の理論、野散の詩学、自覚の理論と識字運動な

どを含む——を産み出し、育ててきた。世界に点在する社会学的感性がこの状況に共鳴盤を見出ださないはずがなかった。文化革命と学園闘争に触発されて開花したかに見えた自己認識の社会学、再帰的 sociology、社会学の sociology は、今日、少くともアカデミーの正規のカリキュラムにはほとんどその痕跡をとどめていない。にも拘わらず、文化革命前後、あるいはそれ以前から構造変化に響応していた感受装置の土壌から、社会学の自己変革の種子は発芽して、漸く自らを顕現し始めている。フランスの Edgar Morin (*La méthode*, Edition du Seuil, 1977), Michel Foucault (*Naissance de la prison*, Gallimard 1975, *Histoire de la sexualité*, Gallimard, I=1976, II, III=1984) Julia Kristeva (*Pouvoir de l'horreur*, Edition du Seuil, 1980) Alain Touraine (*La voix et le regard*, Edition du Seuil, 1978) 'ヘギン' 10 Ivan Illich (*Shadow Work*, Marion Boyars, 1981, *Gender*, Pantheon Books, 1982) 'アメリカ' Gregory Bateson (*Mind and Nature*, John Brockman Associates, 1979) Erving Goffman (*Frame Analysis*, Harper Colophon Books, 1974, *Forms of Talk*, Univ. of Pennsylvania Press, 1981) 'イギリス' Frances Yates (*Astraea*, Routledge & Kegan Paul, 1975) Mary Douglas (*Natural Symbols*, Barrie & Rockliff, 1970) あるいはイタリアの Carlo Ginsburg (*The Cheese and the Worms*, Routledge & Kegan Paul, 1980) またブラジルの Augusto Boal (*Theatro del Oprimido*, Buenos Aires, 1975) などをあげるだけでも、社会学の新しい波の一端を垣間見ることができるといえる。

世界社会学は、こうした社会学の自己変革の一環節であると同時に、いかなる社会学もが分けもつべき底層的な枠組として構想される。

世界社会学は「世界の社会学」ではない。世界各地を対象とする社会学なら、国際関係論や地域研究のジャンルがすでに定立している。また世界社会学は、従来世界連邦の構想と共に唱えられてきた「世界社会学の学」でもない。世界社会学は世界のシステム化がその存立の一大動機となり得るにせよ、統合された世界社会ないしは世界共同体が今日存在するというオプティミズムを取らないからである。世界社会学は、ハイフン抜きの一つの認識枠組

であり、多分に世代感情に裏打ちされた一つの身体図式でもある。

世界社会学は、加速されつつある世界のシステム化への反応のスタイルである。市民の日常生活と国家の活動とは相互浸透し、政治・経済・社会・文化の機能系は相互に切り離せず、国内問題は国際関係に密接につながり、資本主義と社会主義の政治社会体制は共通の官僚制的構造と大衆消費社会の構造に貫通され、南と北とはぬきさしならぬ不均衡交換系を構成し、しかも低成長下の世界システムのゼロサム社会化と同時に、国境を超えた民衆の連帯行動や市民参加の拡充が見られ、あるいは群馬県太田市の萩原鉄工所とドイツのルノーとの直結関係のように、組織や企業間に、国を超えた関係が結ばれる。世界のシステム化が、そのようなシステム化を見届け、システム化をのり超えていく眼としての世界社会学を呼び起すのだ。

たとえば鶴見良行の『バナナと日本人』（岩波新書、一九八二年）は、日本人になじみのバナナを取りあげて、アメリカの多国籍企業が東南アジアのプランテーションに強いている村人たちの生活と、食卓にバナナを盛る日本人家族の消費生活との間を、バナナの流れを追いながら克明につなげて見せ、その間に成り立っている、国家間を斜行するシステムの具体的な姿を取り出すことによって、世界社会学の範例を示している。

システムはその全体的な力でシステムの構成単位を拘束するけれども、その構成単位は一つの生命系として、システムに同調するばかりでなく、反システムの自律的な力をも潜在させている。世界社会学は、システム化を把握するばかりでなく、反システム化のベクトルを見出し、それに力を添えようとするだろう。その点で、世界社会学における「世界」は、歴史意識が選び取った独特の意味論を含みもっている。歴史学においては、人類史から世界史へという視野の転換があった。つまり人類の自己完成能力の成就をめざす普遍史という近代西欧型の一元的な歴史像から、多様な時空系の分散という多元的歴史像への、今日では疑いようのない転回があった。私たちが、社会学の自己革新としての世界社会学のなかに見定めようとしているのも、そうした歴史像の転回にも似た社会像の

転回である。すなわち、人類の暮らし方の歩みについて普遍性を前提する人類社会学ないし普遍社会学から、多元的な共約不可能な諸社会形態やエスニック・グループの共存と棲み分けを認めるヴァナキュラーな社会学にして世界社会学へ、という転回である。

世界社会学は、この意味で、まずもって社会学自体の非中心化を企てる。欧米起原の社会と社会学に限ることなく、アジア、アフリカ、中東、ラテン・アメリカ、東欧、地中海世界など、従来マージナルと見なされてきた社会と社会学とを並列化して、いわばマンダラの構図の中に位置づける非中心化的な認識装置が形成される必要がある。だからと言って、非中心化は単に地域に及ぼされるだけでは不十分であろう。従来の社会学は、多く無意識のうち、当該の社会の支配的なセクション、多数派、あるいは中心に身を置いて、そこから少数派や辺境を見てきたと言える。たとえばラテン・アメリカの研究について見れば、たいていの研究が、それが征服者の栄光に焦点を合わせるにせよ、彼らの罪悪を捉えるにせよ、いずれも西欧の視点、征服した側の視点に立っていたことは否めない。つまりラテン・アメリカを「発見」し、アステカ王国やインカ帝国を「征服」し、キリストの「恩寵」をもたらした主人公は西欧の白人であり、インディオは働きかけられる対象にすぎなかった。しかしながら一九五〇年代以降、インディオをラテン・アメリカ史の主体として捉える見方が現れてくる。フランスのアナル派の流れを汲むナタン・ワシュテルの『征服された者の想像力』(Nathan Wachtel, *La vision des vaincus*, Gallimard, 1971. 邦訳Ⅱ小池佑二訳『敗者の想像力』岩波書店)も、スペイン人による征服がインディオの眼にどのように映ったかという視点をもった研究の一つである。ワシュテルは、インディオの口頭伝承や民間芸能などの土着史料を分析して、白人の到来と征服がインディオの固有のコスモスにひき起した衝撃の集団的記憶を復元する。特に、今日も祭りの際にくり返し上演されている「征服の踊り」の分析から、スペイン人にとっては「原住民の征服」にすぎないできごとが、インディオにとっては、自分たちの神々の死、したってインディオの生きる世界の全面的虐殺であり、しかも救世

主待望と世界の復活が今も集団的無意識として生き続けていることを深い洞察力をもって取り出している。ただし私には、ワシュテルが鍵用語として用いている「文化変容」は、文化の表層の変化や習合にも拘らず、破壊された古代インカ文明がその残骸に依拠して沈黙のうちに続けている征服者への拒絶を表出するには、いささか文化適応を促す視点の色濃い、したがって無力な概念に思える。そうした問題点を残しながらも、『征服された者の想像力』は、「征服された者」が決して「敗者」とはならなかった歴史の過程を、征服された者の眼の内側から照射しているのである。

東南アジアについても同じようなことが言える。日本人は、自らがその中に住む西欧中心・民族国家・中央集権・定住農耕という枠組を東南アジア像に投影することから抜け出ることができなかった。だが、地図をひろげれば、東南アジアとは広大な水空間の中に点在する島々のことである。鶴見良行は、東南アジアなら至る所に見られるマングローブの密生する海辺の沼地に着目する（『マングローブの沼地で』朝日新聞社、一九八四年）。彼はミンダナオ、スルー、ボルネオの沼地を見て歩き、また膨大な文献の読解とあわせて、沼地に生まれた移動分散型社会の像を編み上げた。マングローブの沼地には、漁民、水夫、船大工、商人、焼き畑農民など、環境に応じて分散し、移動する人々がいた。村は大きくもなれば小さくもなり、村と村の連合も状況に応じて自由に組み替えられた。忠誠の選択権は民衆にあって、指導者が悪ければ取り替えたり、逃亡したりした。中央集権制を必要とせず、西欧の侵略者に対する抵抗は多く草莽の移動する戦いだった。東南アジアが今日でも統一国家の形成に苦しんでいるのは、こうして早くから村レベルで分権型民主主義を発達させ、移動分散型の生活様式を営んできたからである。東南アジアを内側から見る眼が、東南アジアの沼地に発生した移動分散型社会、移りゆくアイデンティティを明らかにし、ひるがえって、日本の基層文化に移動分散性が潜むことをも示唆するのである。

多数派の視点は、社会学の重要な用語、たとえば余所者や境界人の概念にも入りこんでいる。よく知られている

アルフレッド・シュッツの「ストレンジャー」は、ある集団に永久に入ろうとしている者、また入ることを望んでいる者として定義されている。つまり「ストレンジャー」とは、多数派の市民社会に入りたがっている者で、移民や都市への移住者がその典型ということになる。市民社会が大前提としてあり、それへの少数派の適応・不適応が問題とされていて、「ストレンジャー」と呼ばれる少数派の側から見れば、多数派こそが「ストレンジャー」と見える側面は射程に入っていない。クルト・レヴィンが提示した「マジナル・マン」もまた、多数派集団に対する少数派集団であって、秩序に不適応な境界的な存在として定義されている。また、柳田国男の「山人」すら「常民」と共に多数派志向の枠組を免れていない。すなわち、「常民」が里の定住者なら「山人」は山の定住者であって、二つの定住社会の秩序を震撼するケンシ、世間師、動民、「わたらひ者」、「山と里との間の皮膜を流れてゆく者」（木寛之『風の王国』新潮社、一九八五年）、要するに非定住者が柳田の概念図式から排除されているのである。

非中心化的な世界社会学は、余所者、異人、異族等の用語を鑄直してそれを関係概念に組み替え、少数派の内面的な眼を活性化させる必要があると考える。

認識の非中心化は、こうして他者を差異をもつ自律的な総体として、つまり共約不可能な自存するコスモスとしてとらえる視法を要求する。だがコスモスは、そこに住まう者が内側から感得する、日々生きられる世界だ。他者のコスモスは、他者の身になって見る眼によってしか捉えることができない。そこで世界社会学は、コスモスの共約不可能性の認識と、他者と共につくる通文化への可能性の認識という背反的な二重性を、いずれをも放棄することなく生きざるを得ない。

世界社会学は、右のような意味でのダイナミックな二重性において、諸地域・諸社会的セクションに固有の生活系をその領域仮説に据えようとする営みである。アジア、アフリカ、中東、ラテン・アメリカと仮に地域の名で呼ばれた地平は、世界社会学が射程に入れる横の拡りないしはマンダラの側面と言える。それと同時に、世界社会学

は、各地域の生活系の縦に重なり互いに葛藤をもつ層、つまりマイクロ・コスモスからマクロ・コスモスに至る縦深的なレベルをも探究する。具体的には身体、ジェンダー、生活世界、できごと、組織、エスニシティ、階級、国家、世界、生命系といったレベルである。ミクロ・コスモスに就く世界社会学は、ピエール・ブルデューが日常のテイストの差異に権力システムの働きを見るように (*La Distinction*, Minuit, 1979)、日常世界の細部や残余にも「社会的現実」への緒口を見出そうとするだろう。マクロ・コスモスに即した世界社会学は、イマニユエル・ウォーラーsteinが試みたような「近代世界システム」のダイナミクスをも探究しようとするだろう。縦深的に配列された生活系のコスモスは、いわば世界社会学の須弥山の側面を構成する。

こうして世界社会学は、社会学的コスモロジーのマンダラと須弥山、水平軸の配列と縦軸の配列、横系と縦系という双側の構図から構成される。

世界社会学が従来の社会学の領域(家族、農村、都市、労働、政治、教育、福祉など)を排除するものではないことは言うまでもない。むしろそれらの社会学の実証は、世界社会学に必要な不可欠なプレ・テキストである。問題は、これらのジャンルを横切って、社会の原動力に切り込む方法的な繊細な眼をもてるか、ということである。人間、自我、性、階級、共同体、記号、文化、政治、国家といったあまりに自明で陳腐なものになってしまった観念を根元的に問い直すこと。これらの自然化した概念に埋め込まれていた意味論を発掘して、概念をいきいきしたものに再賦活したり、ある概念は解体しつくして、アクチュアルな別の概念を日常語の中から見つけ出す眼の働きをどこまで方法的に持続できるかが問われている。日本社会における「中流意識の画一化」とか「権力非集中」といったほとんど通説のように考えられている現象の中に差異を見出し、都市と農村、工業と農業の対立項でなく、定住と非定住、生産と非生産の間に新しい切線を見出すような眼の動きが求められている。

世界社会学の非中心化と脱領域化とは、したがって対象と領域に限らず、理論枠組、方法論、調査方法にも及ば

ないわけにはいかない。たとえば、日常世界のミクロ・コスモスの一つの解読装置としてエスノメソドロロジーがある。法廷や病院、学校や街頭で行われる社会行動や会話分析に成果をあげてきたエスノメソドロロジーにおいては、社会学、人類学、政治学、民俗学、記号学、社会言語学、ドラマティズム等の境界は易々と超えられてしまっており、それが社会学か人類学か社会言語学かといった属性の識別を行うこと自体が意味をなさなくなっている。また、マクロ・コスモスへの取り組みの一つとして、政治空間論・政治時間論が構想される必要があるが、この構想を支えるのは、従来の政治学に加えて、都市人類学、建築学、民俗学、イコノロジー、社会史などであるだろう。ベンサム議論を踏まえて、近代の公的建築物の「パノプティコン（一望監視方式）」を中央集権的な権力のあり方と結びつけたフーコーの研究 (M. Foucault, *Naissance de la prison*, op. cit.) は、その一つの範例である。世界社会学の方法論は、探究のレベルに応じて、政治学、経済学、人類学、精神分析学、言語学、記号学、詩学、イコノロジー、建築学、動物行動学、社会史、哲学、数学等と自在に手を結び合う必要がある。ただしこれらの諸学との交差はいわゆる学際研究を意味しない。学際研究は、共通の主題をめぐって諸学が専門性でそれぞれ自らの身を鍛うことに終るからである。諸々の方法論と理論装置は、世界社会学を担う個体の中で、方法論的社会性として、批判的に交差され、統合されるべきである。

個体の数だけある方法論的社会性に共通する公分母は、対象との相互性ということだろう。解読するテキストと解読されるテキストとは、一つのテクスチュア（織物）を織り上げ、その過程を通して双方のテキストを活性化する。

調査対象との相互性が、調査者と被検者双方に産み出すものを理論的に明らかにしたのは、ポール・ラビノーである (Paul Rabinow, *Reflections on Fieldwork in Morocco*, Univ. of California Press, 1977. 邦訳 井上順孝訳 『異文化の理解』岩波書店、一九八〇年)。ラビノーは、モロッコの村である日、インフォーマントのアリーと感情をむき出し

にしてけんかをした。翌日、ラビノーが謝って二人の関係は修復された。インフォーマントは常に正しいとする人類学的及び腰をわれ知らず蹴とばして、アリーと正面から向き合ったことから、二人の間に深い通いが生まれた。ラビノーはそれまで隠されていたモロッコの文化の尺度を知り、アリーは西欧の文化の尺度を理解し始める。この過程をラビノーは次のように図式化する。調査する側と調査される他者とが共通の認識論上のレベルにあって、双方の感情の激発、関係の腐蝕や中断、ついで谷底からの這い上がり、といった螺旋運動のつい鼻先に、双方がそれぞれの文化を一步抜け出てつくる通文化的コミュニケーションが突如ひらける。ラビノーは、こうした感情の激発や交信の断絶、情報収集の停止といった迂回路こそが調査の中核だと言い切る。

時には対立をも含む相互性の回路が産み出すものは、調査者が一方的に被検者からむしり取ってくる文化の残骸でなく、また調査者の文化の恣意的な投影でもなくて、調査する側とされる側とが手持ちの素材で協力してつくる新しい文化のブリコラージュであり、一つの通文化なのだ。世界社会学はこうした通文化の産出を企てる行為である。

もしも社会学の装置が硬直化して、対象との相互性を阻むのであれば、社会学の機構は一度解体されて、徒手空拳の社会学的身体が営む、手法としての世界社会学が目ざされるべきだ。極限の形としての方法論的アナキズムはむしろ自覚的に追究されてよい。

世界社会学の理論装置が固有のコスモロジーを構成する際の基体は、第一に社会学的身体が準拠する言語共同体のコードであり、第二に対象とする文化と自らの文化との間に構成される通文化のコードである。世界社会学が固有の文化に根をもち、しかも通文化を通して他者の文化に開かれているかぎり、日本の世界社会学は、まずもって日本の社会的現実との対応のなかから、神島二郎、京極純一が試みた日本政治のモデル化のように、日本型のあるいはアジア型のメタ言語による理論装置を自覚的に引き出し、それを異なる世界へ開放することを企てる。

たとえば、表層が管理―被管理の産業合理的な関係、深層が天皇制を空虚な中心とする再分配幻想で統合されている日本社会は、世界に冠たる管理社会であって、この日本型の管理社会は、*controlled society*, *management society*, *administrative society* のいずれによってもその本質を十分説明することができず、むしろ *Kanri society* として先進産業社会のモデル群のなかに積極的に提示されてよい。同じように、大東亜共栄圏の共同幻想は、今日の第三世界の強権体制とコーポラティズムの力学をよりよく説明するモデルかもしれない。さらにまた、受験地獄と学校化、薬漬けと医療化という点で世界有数のわが国は、産業的制度化・サービス専門制度化の範例を世界に提供し得るだろう。欧米型の理論装置も日本の社会的現実をくぐらせて批判的に修訂される必要がある。さまざまな社会的現実を母胎として引き出された諸理論装置の葛藤の場をつくり出すことも世界社会学の射程に含まれる。

世界社会学は、第一に、実体化してとらえた静態的な社会的現実から理論モデルを抜き出す手順を踏む。しかし私たちはそこにとどまることはできない。第二に、理論モデルを現実のカオスにつきつけて、そこに新たな社会的現実を呼びおこし、今生まれつつあるものに手を添える往還の道筋を踏む。しかも第三に、よび醒ました新しい現実のなかにも相剋性と相乗性の両義性を看取り、新たな現実も非実体的に措定し直すことによって、認識装置自体の権力化を阻むと同時に、生きる主体を自己蘇生の過程に解き放つことが求められる。権力化した産業的な制度を批判的に解体しようとする社会学が、自らの学問を権力的なサービス商品に仕立てるわけにはいかないだろう。新しい共同性の現実を立ち昇らせると同時に、自己の痕跡を消去していき、生の現実のさなかに自己回復的に生き直すことが、世界社会学の究極の目標となる。

還元の世界社会学。構成の世界社会学。非構成の世界社会学。この三者ワン・セットは、世界社会学の装置として欠かすことができない。公的領域ばかりか私的領域にも深く浸透している産業社会、管理社会の力学を読み抜き、それを否定的に超え出ようとする潜勢的な力を見定めかつそれを喚起すること。制度に沈澱し凝固するものと同時に、今生成

しつつあるものを鋭敏に捉え、あるいはいのちの相互性の形をそこに浮上させること。世界社会学の課題はそれにつきる。

世界社会学は、ニュー・メディア時代にいつそう進行すると考えられる国家のシステム化、世界のシステム化を捉えるばかりでなく、生命系のネットワークキングの生成を見届け、積極的にそれを支えようとするだろう。システム化に対抗して一種の「退行計画」を立て、退行した空間のネットワークキング、退行した時間のネットワークキングを構想するだろう。

その本性上、世界社会学の実体はどこにもあり得ない。世界社会学は、人々の非産業的で非権力的なライフ・スタイルへの無限接近を目ざし、その意味で自らの透明化を求める。世界の回復を求める眼、手、足だけが残る。世界社会学の仮の住まいは、アカデミーであることも、野散であるときもあるだろう。どの場にあっても、ただ志あるひとりひとりの身体においてのみ、しかも身体と身体との間の非権力的な相互性の関係においてしか、世界社会学は生きられない。大地に散種された世界社会学が萌え出て、野を茫茫とおおいつくす日の夢想を失いたくない。